

一 般 演 題

1. ^{123}I -IMP Acetazolamide 負荷脳血流シンチグラフィによる片側および両側性閉塞性脳血管障害例の検討

大山 洋一 富口 静二 辻 明德
鍋島 光子 吉良 朋広 中島 留美
高橋 睦正 (熊本大・放)

目的：片側性病変と両側性病変において Acetazolamide の脳血管に対する反応性の違いを両者間で比較検討する。

方法：安静時および Acetazolamide 1 g 静注後 15 分目に ^{123}I -IMP 165 MBq を静注し、15 分後に SPECT を施行した。前頭部、側頭部、後頭部、視床、基底核、小脳について視覚的および健側および病側のカウント比を用いた半定量的評価により血管反応性を検討した。

結果：1) 両側群では基底核の循環予備能の低下を片側群に比べ高頻度に認めた。2) 片側群で視床、基底核に diaschisis を認める頻度が両側群より高かった。3) 両側群では全体の 20-30% の領域で反応性の評価に絶対値に近い定量的指標が必要と思われた。

2. 失語を合併した高血圧性脳内出血例の脳 SPECT について

桂木 誠 足立 育子 秋田 邦生
木村 史郎 井手口尚生 松井 正典
筒井 竹人 西原 春實
(聖マリア病院・画像診断セ)
鳥越隆一郎 朔 義亮 (同・脳神経セ)
村上 敏子 (同・言語療法部)

失語を合併した被殻あるいは視床出血例における脳 SPECT について検討した。対象は被殻出血 15 例、視床出血 7 例である。視床出血では全例が健忘失語の状態、SPECT 所見は比較的軽微であった。被殻出血では軽度の健忘失語から全失語の状態まで種々の状態がみられた。SPECT でも外側皮質域の軽度の低下から半球ほぼ全域にわたる高度の低下までさまざ

までであった。皮質域の低下は失語の重症度やタイプと関連があると思われた。脳 SPECT は失語評価の一指標になると思われた。

3. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO SPECT にて側頭葉内側に低血流域を認めた transient global amnesia の一例

石野 洋一 加藤 文雄 山本富淑弥
川崎 能道 村上 稔 大成 宣弘
中田 肇 (産業医大・放)
角谷千登士 (同・脳外)

症例は 54 歳男性。ソフトボール大会で外野守備にいていたところボールを追っていて後方に転倒、後頭部を打撲後約 40 秒間意識不明が続き回復後も顔色が悪かったので来院。来院時、自分の名前はいえるが住所ははっきりと記憶しておらず、また当日のことは全く覚えていなかった。その後徐々に記憶が回復し、受傷前後の短期間の空白を残すのみとなった。受傷直後の CT や 4 日後の MRI では異常を認めなかったが、受傷 47 時間後の HMPAO SPECT にて左側頭葉内側に低血流域を認めた。2 か月後の SPECT では同所見がはっきりしなくなっていた。以上 Transient global amnesia の一例に関して若干の文献的考察を含めて報告した。

4. IMP SPECT 後期像にて欠損がみられた脊髄小脳変性症の一例

星 博昭 陣之内正史 フローレス レオ
楠元 直 大西 隆 二見 繁美
長町 茂樹 小玉 隆男 邊辺 克司
(宮崎医大・放)

症例は 54 歳女性、20 歳時に体幹失調で発症し以後緩徐に進行し脊髄小脳変性症と診断された。 ^{123}I -IMP による脳血流シンチグラフィ早期像にて小脳の萎縮による血流低下が見られたが、大脳半球に血流異常は見られなかった。後期像では、小脳および後頭葉の集積が低下し、特に小脳上部、後頭葉下部内側で